# 緑の牧場 53号　2024年2月末 発行
# 巻頭メッセージ
# 「2023年のアドヴェントからクリスマス その小さな発見」

**牧師　森 言一郎**

## 1.　「主」という言葉との新たな出会い

2023 年の 12 月、クリスマスに備えるアドヴェントの頃。わたしは説教の準備をしていて、『新約聖書ギリシャ語辞典』（織田昭編、大阪聖書学院、1965 年）中の**「主＝キューリオス」**という語についての解説に立ち止まり、なぜか急に勢いづいて、その箇所だけの抜粋をプリントアウトしていました。

そして、ある場面で、少しの高ぶりを伴う気持ちで、その**「主＝キューリオス」**について解説したギリシャ語辞典の中身を皆さんに紹介したのです。

以下のゴシック体の箇所が、織田先生というギリシャ語辞典を編纂された方がまとめた内容です。わたしの心にグサリと刺さりました。**「主＝キューリオス」**の四番目にこうあります。

**（四）君主、主君、国王、帝王**

**ローマ皇帝特にネロについて「キューリオス（織田先生の本ではギリシャ語表記）」という称号がしばしば見られる。全世界がこの主権者を「キューリオス」と呼んでいた時に、イエスを「キューリオス」と呼んだキリスト者たちがどんな立場に立ったかは、容易に察せられる。**

聖書を講じるようになってから曲がりなりにも 30 年が経過しているわたしなのですが、このような簡潔な解説の言葉を、講壇から語ったことは一度もありませんでした。もちろん、異なる言葉で似たようなことはお話したでしょ

う。そして、同様の意識はもってきたつもりでした。しかし、明確さが足りませんでした。

## 2.　「クリスマスの賛美歌を歌おう」で共に歌った「いざ歌え、いざ祝え」(『こどもさんびか改訂版 70番』）②節の歌詞について

馴染みのあるクリスマスの時期に歌う賛美歌に、「いざ歌え、いざ祝え」があります。『こどもさんびか』にも収められている歌いやすいメロディーの曲です。讃美歌の解説書を読んでみると、アフロ・アメリカン・スピリチュアルの「勝利をのぞみ」もこの旋律に由来する、と紹介されています。

わたしが気になったのは②節でした。毎年 12 月に行っている「クリスマスの賛美歌を歌おう」（「アドヴェントの賛美歌を歌おう」もありますが）の時間では、だいたい、歌詞を何らかの形で吟味してから参加者と共に歌い出すのですが、②節にはこうあることに、実は初めて気が

付きました。今までも歌っていたに違いないのですが、意識していませんでした。

**② ＊『讃美歌21』**
**いざ歌え、いざ祝え、このめぐみの時、**
**悪しき世は　くだかれぬ、喜べ、主にある民よ**

この度、どうしても気になりましたので「1954年版」として呼ばれる『讃美歌』の 108 番②節を開いて確かめてみました。すると、以下の歌詞が出てきました。明確な違いがあるのです。

**②＊『讃美歌』**
**いざうたえ、いざいわえ、たのしきこよい、**
**すくいぬし　世にいでぬ、いざほめたたえよ。**

いかがでしょう。1997 年発行の『讃美歌 21』では**「悪しき世は　くだかれぬ」**とありますが、1954 年版の歌詞は、**「すくいぬし　世にいでぬ」**なのです。

子どもたちが、声合わせて、しっかりと**「悪しき世は　くだかれぬ」**と一度歌うだけでも、歌詞を記憶することでしょう。今の時代、この歌詞を子どもたちや幼児、そして多感な青少年が歌うとき、どのような「悪しき世」を想像するのでしょう。

わたしが五歳の頃のことです。故郷・大分市の臨海工業地帯で私の祖父や両親も仲間入りして開拓伝道を始めていた「鶴崎伝道所」（のちの大分東教会）が行った初めてクリスマス会に参加したとき、「もろびとぞりて」（讃美歌21-261）を歌いました。その日の「主は来ませり」は身体（からだ）の深い所に興奮と共に刻まれました。意味はよくわからないのですが、ウルトラマンが口にする「シュワッ」に重ねて子どもの心はたかぶりました。そして「主は来ませり　主は来ませり」が本当に大人になるまで、ずーっと忘れられない賛美歌となったのです。

前段で確認したように、「喜べ、主にある民

よ」の「主」は権力者であるローマ皇帝アウグストゥスではなく、救いのみ子イエス・キリストなのです。救い主の誕生の時代背景には、「悪しき世は くだかれぬ」と声を揃え、心を合わせて歌い、祈るべき「闇の世」があったのです。

今日(こんにち)、ウクライナの寒さの中で塹壕(ざんごう)に身を隠し、戦火を逃れ、ヘルメットを手で押さえて命を守る兵士たちがいます。パレスチナ・ガザ地区に、イスラエルからの砲弾の嵐が無抵抗の市民の上に降り落ちて来る世は、闇であり、混沌です。救いのともしびが必要です。

## 3. 「裁き」を求める「祈り」が礼拝で聞こえるということ

去年 8 月の平和聖日のことだったと思いますが、長野県の松本教会で牧会されている柳谷(やなぎや)知之(ともゆき)牧師（現、東海教区総会副議長、日本基督教団社会委員会委員長、関田寛雄牧師の牧会されていた川崎市・戸手伝道所から献身）の執り

成しの祈りの一部を説教の中で紹介しました。柳谷先生は、日本聖書神学校の後輩に当たる方です。その数日前に、ある関心事があってわたしは松本教会の礼拝全体を Facebook で視(み)ておりました。

礼拝のおわり近くに、松本教会では牧師による執り成しの祈りが捧げられる時間があるのが日常のようで、柳谷牧師が祈り始めました。

驚きました。それは、「神の裁き」を求める祈りでした。戦争が続く彼の地を覚えての祈りでした。当時はウクライナのことが口にされたかも知れません。いや、日本国内のことだったか。でも、「裁き」を祈るそのお声を、聞き間違えるはずがありません。礼拝でそうお祈りする同労者の姿勢に、わたしは打たれました。目から鱗が落ちる瞬間でした。

## 4. 『讃美歌21』の「まえがき」を読み直す

わたしたちが今使っている『讃美歌 21』の「まえがき」の五ページ目に、この賛美歌集を生みだすための責任を担われた方による解説の言葉が八項目にわたって記されています。ここでは、特に、三つだけを抜粋して紹介します。正に今の時代に、平和を求める心で『讃美歌 21』を手にして礼拝を捧げ、信仰生活を続けることの意義が明らかにされているからです。

**（まえがきの五ページ目より）私たちは、次のような歌が必要であるという視点をもってこの賛美歌の編集に当たりました。**

**① … 現代という変化する時代状況の中で、信仰を証しする歌。**
**④ … 今日における宣教の使命の多様な展開とそのような新しい領域への視野を持つ歌。**
**⑦ … 礼拝以外の諸集会や信徒の生活の中でも、多様な展開ができる歌。**

あのルカによる福音書の「マリアの賛歌＝マ

グニフィカート」の後半が、世の力に抗(あらが)う主を迎える喜びが歌われていることと、ここまでわたしたちが思い巡らしてきたことは、何の違いもありません。ルカ福音書 1 章 51 節以下にこうあります。

**「主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、権力あるものをその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ」**

このみ言葉が下地になっている「マリアの賛歌＝マグニフィカート」をアドヴェント第二の礼拝で今年は一気に三曲を賛美しました。それは、わたしたちにできる精一杯の祈りだったと思います。

## 5. 平和を待ち望み歌い続けよう

わたしは青年時代、賛美歌の歌い方がよくわかりませんでした。ただ、大きな声で賛美していただけかも知れません。でも、今は、変わったことを自覚しています。賛美という名の祈り

を通じて、わたしたちは心を込めて賛美歌を歌う、祈る民として生きているからです。力の主を祈り求め、ほめ歌うことを、オブラートに包む必要はありません。はっきりと、明確に意識して、**「悪しき世は　くだかれぬ」**と歌い祈るのが、平和を創りだす民であるキリスト者の生き方だからです。

2024 年のクリスマスには、**「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。」**と、満点の星空を思う心で、天使たちと共に高らかに賛美する時を過ごしたいと願っています。end